

トンボはどこまで飛ぶかフォーラム 参加団体 活動紹介

あおぞら自然共育舎 早川広美

私は「あおぞら自然共育舎」を主宰し、自然体験型環境教育の仕事をしています。ネイチャーゲームや自然観察、保全作業の指導などと共に、「トンボを指標としたビオトープ活動」のコーディネイトも柱の一つとなっています。

参加者の皆さんに対して「トンボは1kmくらい飛んで移動するので、半径1kmの円内にビオトープが連続してあれば、トンボ（生きもの）が行き来できるネットワークが形成される」という話もしていました。

しかし、「トンボは1km飛ぶだけで、自分では確かめていないじゃないか」ということが頭にあり、何とか自分なりに腑に落ちるようにならんと機会をうかがっていたところに出会ったのが、この「トンボはどこまで飛ぶかフォーラム」でした。

2008年から調査に参加し、実際にトンボを採り、マーキングをし、その中の何頭かが移動したことがわかり、私の中では「やった、私はこれを知ることがあったんだ！」と本当に嬉



しい気持ちでした。

やはり、自分の体と心を動かして体験することや、観察や調査、実践で疑問を確かに行うことは、本当の自分の血となり肉となる、と思います。私自身の環境教育の仕事でのモニターも「体験による気づき」です。このトンボフォーラムでの活動では、改めてその大切さを私自身が確認でき、仕事において参加者の方々の体験と気づきをより大切にしたいと願う契機にもなったのでした。

よこはま里山研究所 NORA

NORAが目指すもの里山は、人びとの営みによって、つくり上げられてきた身近な自然です。

ここでは、人びとのはたらきかけの違いによって、田んぼ、畑、雑木林、草はら、ため池、小川など、さまざまな景観が広がり、たくさんの生きものが育まれてきました。また、人びとは自然とかわる知恵や技を、親から子、子から孫へと受け継ぎ、深く豊かな文化が残されてきました。

しかし、現在、多くの里山が経済的な価値をうしない、人びとの関心の外へと置かれています。

NORAは、かつての里山がそうであったように、私たちの暮らしと里山との距離を近づけることによって、生命（いのち）のつながりが感じられる機会を取り戻します。そして、身近な里山が輝くようになれば、その自然の恵みを生活に取り入れることにより、私たちの暮らしも豊かになると信じています。

あらためて人と里山の豊かな関係を結び直すためには、今は見えなくなってしまう里山の価値や、まったく新しい里山の価値を掘り起こす必要があります。

そして、その価値をシゴト※へと変えていきながら、自立したNPOとして成長していくことを目指しています。

鶴見「みどりのルート1」をつくる会 会長 高田房枝

私たちの会は、横浜市鶴見区の国道1号にある北寺尾交差点を中心に約1kmの国道沿いにある学校、レストラン、自動車等の販売店、スーパー、倉庫業などが集まり、緑化計画を立て、各敷地内を緑化しています。

始めたきっかけは、4・5年の間に景観が急速に変わってきたためです。色とりどりの店舗看板が乱立し、店舗建築時の植栽は枯れたままでした。まちとしては便利になった反面、騒々しい街の印象です。そこで緑化された沿道をつくろうという呼びかけに企業21社と住民が集まり、平成24年10月、会を設立しました。横浜市のみどり税等を財源とした「地域緑のまちづくり事業」による助成も受け、活動は、企業、住民、行政が協働する形になりました。

緑化計画の方針は、生物多様性の植栽ゾーンをつくり、それを繋いで沿道里山と名付け、沿道緑化のモデルとなることを目指しています。緑化計画のテーマは、①みどり

の拠点をつくる（A商業施設の駐車場B道沿いのみどりをつくるC壁面にみどりをつくる）

②みどりを楽しむ（講習会、観察会、交流イベント開催）です。

計画の方針には、トンボフォーラムの会による調査結果や講義内容を反映することができました。緑化後は店舗とお客様との交流、スタッフの方たちの職場環境に予想以上の成果が上がっています。

今後に向けて、近隣や緑化活動への賛同者のサポーター募集を始めましたが、緑化の維持管理を楽しく継続することが今後の課題です。

図入ります

NORAの参加型プロジェクト

里山の中心には、農村に生きる人びとの居住空間として「ムラ」があります。その周りには、毎日のように出かける田んぼや畑などの「ノラ」があります。さらにその周りには、ときどき柴刈りなどに出かける「ヤマ」があります。

「ムラ」の人びとは、日々、「ノラ」や「ヤマ」でシゴトに励むほかに、「ハレ」の日を大切に心ゆくまで楽しみ、再びシゴトへと戻りました。

また、里山は、ムラーノラーヤマが同心円を描くように広がる中で、田んぼ、畑、ため池、小川、草はら、屋敷林、竹林、雑木林などがモザイク状になって、多様でまとまりのある景観を作り上げていました。それぞれの小さな生態系は、その場をすまかとする「イキモノ」をはぐくみ、高い生物多様性を誇っていました。NORAは、互いが活かしあう里山の相関関係を軸とし、プロジェクトを展開していきます。



※シゴト：哲学者・内山節氏によれば、「カセギ」がお金のためにする労働であるのに対して、「シゴト」は自然に包まれたムラで生きていくうえで必要な、人としての役割を意味する。

京浜の森 トンボとヤゴの図鑑

ギンヤンマ



水面が開けた明るい大きな池を好みます。岸沿いに飛びます。ビオトープでも頻繁に観察できます。横浜では4月中旬から10月まで見ることができます。



水草にぶら下がり生活します。とても獰猛で、獲物を待ち構えて下唇をのばして魚やオタマジャクシなどを捕らえます。

クロスジギンヤンマ



ギンヤンマとよく似ていますが胸に2本の黒いスジがあり♂は腹部は黒く青い斑紋が並びます。ギンヤンマよりも閉鎖的な環境を好みます。横浜では4月初旬から9月まで見ることができます。



ギンヤンマ同様大型のヤゴです。ギンヤンマとそっくりですが防火用水槽のような小さな水辺にも生息します。横浜ではギンヤンマよりもやや早く4月から羽化を始めます。

コシアキトンボ

成熟したオスの腹部の付け根が白いことから「腰空き」という名前がついています。池の縁にそって高速で飛ぶ姿をよく見かけます。



やや広い池などの水底を這うように生活しています。かなり汚れた池にも生息します。背中に特徴的な大きなトゲがあります。黒っぽい個体が多く見られます。

オオシオカラトンボ

シオカラトンボに似ていますが一回り大きく青みが強いトンボです。シオカラトンボよりもやや閉鎖的な環境を好みます。横浜では5月から9月まで見ることができます。



シオカラトンボの仲間のヤゴはどれも良く似ています。オオシオカラトンボは背中にトゲがあり同じ場所に生息するシオカラトンボと見分けることができます。

ウスバキトンボ

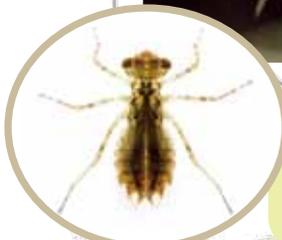
横浜では冬を越すことができず、毎年南方から世代を繰り返しながら北上してくるトンボです。ちょうどここまで飛ぶか調査の頃、群れ飛ぶ姿が見られます。



水草がない池などに見られます。とても成長がはやく1か月程度で成虫に羽化します。寒さに弱く横浜では冬を越すことはできません。

アキアカネ

近年全国的に数を減らしているアカトンボの一種です。横浜では6月中旬頃羽化していましたが京浜臨海部では8月に羽化している個体が数多く確認されています。横浜では6月から12月まで見ることができます。



三角形の頭をした典型的なアカネ型のヤゴです。田んぼや池、湿地などの水底の泥に浅く潜って暮らしています。以前横浜のプールのヤゴといえばアキアカネでしたが、現在ではコノシメトンボが優占種になっています。